

【高齢者の生きがい】

東海社会福祉科学研究所

大北 秀雄

(17) 生活実態（終末期）

○高齢者の終末期を考えていく上では、その主体となる高齢者自身が、終末期に対し、どのような考えをもっているのかの実態を把握することが大変重要であり不可欠ですし、その内容により多少でも支援ができれば良いことであり、そのことを検討することが大変重要なことです。

「参考資料」

①ある老人クラブにおいて、自宅で生活する高齢者を対象に自由記述による終末期の迎え方に対する希望調査結果

・有効回答 284 名, 平均年齢 74.6 歳

・記述内容を意味の共通性に従い 6 つのカテゴリーに分類

「(1) 死に方の希望」「(2) 死ぬ時の身体的, 精神的状態の希望」

「(3) 死ぬ時の環境・状況の希望」「(4) 死ぬまでの身体的状態の希望」

「(5) 死ぬまでの生活・生き方の希望」「(6) 死後の希望」

・さらに 3 つのカテゴリーに分類

「1. 死ぬ時に関する希望」「2. 死ぬまでにに関する希望」「3. 死後に関する希望」

・希望の内容は、死ぬ時のことに限らず、現在から死後のことに及んでおり、高齢者の終末期のとらえ方は個人により異なることが明らかになりました。

・終末期の希望に現在のことが含まれていたことから、死ぬ時だけでなく、死を迎える以前の生活や生き方もケアすることが重要であると示唆されました。

・希望は抱いていても、それを、他者に伝えている高齢者は少ないことが明らかとなり、高齢者の希望を尊重するためには、終末期に対する考えや希望を表出できるように援助する必要があると考えられました。

②終末期の蘇生を拒否する患者

今後こういう高齢者が増えてくる状況ですし、「個人」の意思を尊重する意味が増えて行くことになると言われています。

・体的な死よりも精神的な死を尊重する時代

・友人の居ない病院で死ぬことに対する不安

・自宅において心停止で発見、そのあと病院に運ばれて、回復の見込みが悪くても、機械に繋がれてまでして生命を維持するかという問題

・人間としてどう生きるかを選ぶことはできても、どう死ぬかを選ぶのは、そう簡単なことではないという事実です。